

善行をしたので仲間から感謝されるなかなかの男です。

上協氏の労苦は、他の方のような悲劇の物語りではないのですが、軍の内部から見た違った角度からの貴重な一編だと思えます。

現在七十五歳、姑を見送った奥様と、女二人・男一人のお子様と、六人のお孫さんに囲まれた、お幸せな境涯です。

(東京都引揚者団体連合会)

理事 三橋 渡比丸)

## 比島敗走記

神奈川県 福井 勉

### マニラ脱走

夕陽の美しいフィリピン・マニラの空に戦雲低く垂れこめて、夜ごと日ごと黒煙が覆う昭和十九年の暮れ、既に首都放棄を決意した軍は、マニラを捨てて続々と山中へ山中へと向かう。

汽車やトラック・乗用車はもちろん、およそ乗物という乗物は徴発されて軍用車となった。そして、それらが夜を日に次いで、弾薬と人員を満載して、敵機のしつこい追撃を避けながら、戦闘配備に就き始めたころはいろいろな流言が飛んで、さすがのん気なマニラ人たちも、めいめいの家財道具をカルテラ(馬が引く乗合馬車)に積んで郊外へと急ぐ。

市民のこうした動揺を目の前に見ながらも、ただ一筋に軍を信じつつも、次第に身の危険を感じ、治安の乱れ行くマニラの街に心細さを加えていくのは、在留婦女子であった。

父を、夫を、兄弟を、およそ男という男は一人残らず召集されて戦闘部署に就く。在留民はマニラ防衛司令部に召集。最後までマニラに踏みとどまって勇戦。ほとんど玉砕、残るはただ足手纏いの幼子たち。

軍が手薄になるとともに、市中至る所でテロ団の活動が日に日につのり、市内の治安は急速に悪化して夜も昼も拳銃弾が乱れ飛んだ。昨日まで親しかった現地の隣人、召使も、既にことごとく今日の友ではなく

なった。

そうこうするうちに、敵空挺部隊の降下や米軍上陸説が伝えられるとともに、最後に、婦女子移動の軍命令が出たころには、女子供のためには、何一つ乗物が残されていなかった。わずかに走る軍用トラックを呼び止めては、満載された砲弾の上に三人、五人と便乗が許された。しかし、そんな輸送計画で数千人の邦人婦女子が輸送できるものではない。

降誕祭の夜は、米軍空挺部隊の降下が市中に布き伝えられ、婦女子の心に嫌が上にも、大きな不安と言い知れぬ焦燥感が広がっていく。そうして、ついに十二月二十六日の夜、第十四軍参謀の手によって、最後の特別列車が婦女子のために与えられた。かねて用意のリュックサックを背に子供たちの手を引き、胸に抱き、住み慣れたマニラの街にしばしの別れを告げて、パコの駅に駆けつけたころは日もとっぷりと暮れて、灯火管制のプラットホームは母子兄弟お互いに呼び交わす喧声でこった返していた。そして、最後まで日本人を信じていた比島人、長年使ってきたごくわずかの者た

ちが闇にまぎれて近寄ってきて別れを惜しむのだった。

やがて、機関車と最後尾の車両の天蓋には機関銃が備えられ、車両の入口ごとに小銃を持った兵たちが立っている状況のただならぬ中を発車、遠くキャピテの軍港を爆撃している爆発音などが殷々として響き、照明弾や大火災が夜空を焦がしていた。不気味な爆音に追われながらの完全に消灯して婦女子を満載した列車は、通過駅のものものしい軍装部隊と遭遇するたびに、お互いに励まし合う同胞愛の言葉を交わした。車窓の外には、自動車道路を列車と並行に転進する軍用車や邦人会社の自動車、幾つも幾つも追いつ追われつ間にまぎれて北へ北へ進行していた。

翌日の午後着いた終点サンホセは、ちょっとした町ルソン平原のつきるところ、遠く連なる山の懐に抱かれて、南に広がる豊穡な平原には、収穫期を迎えた黄金のきびの波が打ち続いて、空は紫にかすんでいる。この先どんな生活が始められるのか、早く何らかの落ち着きを欲して群れをつくり話も尽きない。先発隊のだれ彼となく無事を祝しつつ、途中の爆撃の恐ろしかっ

たことなど語り続けているのであろう。女学校や教会に部署を定められ、戦塵のまま、炊き出しの握り飯が配られるころは、だれの心にも少しばかりの落ち着きがよみがえってきた。

マニラの整理のために、遅れた人たちや軍の移動部隊が、次々にやってきて、芳しくない情報を伝えることはあっても、町がだんだん日本人で埋められていくことは、何と言っても心丈夫な感じを与えずにはおかない。子供たちのために軍の好意で正月餅が配られ、新しい年の運命は知らずとも、よき年を願って思いがけない所でおもいがけぬ二十年を迎えた。

しかし、平和は長く続かなかつた。偽装網をかぶつた町の警備隊が、慌ただしく駆け出して艦砲射撃の報が知らされ、やがてリンガエン湾への、米軍上陸の報は、一挙に婦女子の群れを混乱に陥れた。

取るものも取りあえず身支度をして軍も官も一塊となって、サラクサスの峠を越すと、戦車がひっくり返って燃えている、トラックが燃えている、乗用車が燃えている、砲がひっくり返っている。名状しがたい混乱

がこの峠を包んで、だれの心にも冷静さが失われ異常な戦場心理が渦巻いた。故障したトラックを捨てては走る戦車に飛び乗り、追いつくトラックを呼んで乗り換えた。

くたくたに疲れた体で、車が峠を下ってカガヤン平原に出たころは、空は晴れて丸い山波は遠く紫に煙り、平原は豊かな実りが広がり、椰子並木が続く街道を風を切って進むトラックの上で、手を伸ばせばもぎれるほどにザボンが実って戦場とは言え、女子供の心にもまた小さなゆとりが湧いてきた。

ボンファルの邦人村（チャ子との出会い）

バナナの葉っぱが音もなくゆらいで、遠く敵か味方か砲撃のうなりはあるにしても、ここボンファルの田舎はひっそりと静かに更けていった。サラクサスの峠を越してカガヤン平原に入ってから、総領事館を中心に二千余人の女・子供は村を作って四班に分かれ、比島人たちの家に雑居して、自活態勢も次々と秩序を加えていった。

マニラに空襲が始まって以来、日本人小学校は閉鎖

され、教員だった私は総領事の命令により、仕事の激増していく日本人病院の応援に派遣されていた。婦女子脱出の救護班として日病医官と同行し、ボンファルの田舎に入ってから、病院設営をし、それが終わるとまた子供たちのため、青空学校を開くことを命じられた。本一冊、鉛筆一本あるでなし、夕方敵機のこない一、二時間を椰子の木陰で草に座し、祖国を知らぬ子供たちの聞きたがるお伽噺や物語りをし、昼間のうちは大きな子供たちを連れ、敵機を避けながら、日ごと野草の採集に忙しかつた。子供供の食料は米は軍から少量の粳と塩が給与され、足りない分は各自一枚、二枚と着替えを脱いでは、原住民と交換していった。野菜も肉も魚もないこの土地で、何一つ副食物は許されぬ、日ごと四百人分の野菜採集はつらかつた。乾期の長いこの土地の草は肉厚く、煮ても蒸しても歯のたちそうにもないものばかり、原住民も顧みぬ木の葉、草の実も採り尽くした。

敵機に襲われながら沼にはびこる水藻の類や川に浮かんだ草を探したことも幾度あつたか。バナナやピン

ロウジュも幹を削り柔らかい部分も食べ尽くした。

ここにきてから全島に散っていた公用を持った人たちや、召集令の届かなかつた人たちが戦線を抜け敵陣を突破して、婦女子部隊に合流してきたが、ここでもまた、男と名のつくものは一人余さず召集されて行った。病人とて容赦せず、松葉杖の障害者も召集されて行った。だから若い娘が村の中心で、すべてが女手で捌かれていった。壕を掘ることも、粳を摺ることも、共同炊事はもちろんのこと、木を切つて日本流の粳摺臼もこしらえた。ふいごを作つて鍛冶屋も始め、壊れた自動車の部分品を拾い集めてポロ（蕃刀）も鍛えた。自活するためにはまず、土地を耕さねばならぬ。この土地を何百年も守つてきた原住民も驚き、不可能と思われた野菜作りがしかも娘の素手で始められた。

皆、勝つことを信じていた。というより疑うことを知らなかつた。殊に、遠く異郷の土地にあらゆる苦難を乗り越えて生きてきた人たちにとって、祖国こそ絶対のものである。日の丸の旗さえ見ればいかなる苦難も苦難としない。開拓民の不屈の魂は美しい何年でも

何十年でも頑張ろう。もとより骨を埋める覚悟なくしてきた者はいない。皆よく働いた。前線から送ってくる軍衣の破れ直しも、一線へ送る糶摺りも草も刈って編む俵造りも喜んで引受けた。山の向こうでは父が、兄が、夫が戦っている。

殊に、若い娘でつくった挺身隊は、邦人部落の花であり、その中でもチャ子は最も勝れた働き手だった。いつだったか、裸足で針を踏み抜いて一夜作業を休んだこともあったが、それだけでいかなる作業もチャ子の姿を見ない時はない。つらい労働はもちろんのこと、日病看護婦を中心に衛生看護、応急手当の実習も、彼女は挺身隊の模範である。精励賞はまずこの人と、領事館からきた書記生の東村長、日本人会からきている平岩助役と私と三人で、よく話し合ったほどだった。

この邦人村で私が与えられた家、それがチャ子たちの仮りの住まいだった。竹梯子を上っていくと、三畳も敷けそうな竹簀張りの一間の隅に、四畳ぐらいの板囲いの別室があって、そこに六、七人の原住民家族が住んで、広間の方に邦人婦女子が二十人ばかり雑居

している。その隅に、たった一つ竹で造った寝台に、私が休ませてもらって、他の人は、皆簀の上や板の上に毛布を敷いて雑魚寝する。以来、私は食事の世話も洗濯も一切彼女たちの厚意のままに甘えて過ごした。係累のないチャ子は子連れの人に比べて、自然そうしたことを親身になって私の身の回りの世話を喜んでしてくれて、お陰で私は村や子供たちのことで日を過ごすことができた。

南国の星は美しい。夜だけが戦いを忘れて人間らしい一ときである。チャ子からよく、マニラでの失敗談や船で遭難したときの恐ろしかったこと、はては、東京に住む家族たちの気質から生い立ちのこまごまな一つ一つを聞かされた。彼女には東京に両親と一人の姉がいる。若いとき船に乗ったことがある父は、彼女には厳しい存在であつたらしい。平凡なやさしい母は、いつも彼女のことを心配しており、姉は彼女より美しくかしい。チャ子は肌色のくつきりと白く、髪は幾分赤く四肢のよく伸びた少女であった。彼女の生まれたころの家族は、余り恵まれたものではなかったので、

小学校を卒業するとすぐ、お菓子屋に勤めて他人の飯を食わねばならなかった。

伶俐で負けず嫌いの気性も、こうした中に次第に鍛えられて、女学校出たてのお嬢さんとは比べものにならない心の強さと体験で、学び得たいろいろな知識も、皆、生きて身に付いたものである。軍用会社の募集に応じて、はるばる南の風に浴したマニラ軍用ホテル付きになってからも、彼女は決して弱い女ではなかった。

事実、こうしたところに勤める女にありがちな驕りも疲れもないチャ子は、外地勤めの娘によくある煙草もたしなまない。通経部隊の将校宿舎だった彼女のホテルも、戦況の不利が目立つようになってから、閑散となってくると激しい郷愁が募って、とうとう最後の引揚船に乗り込んだが、船がマニラを出ていくばくもたたないとき、敵機に襲われて岸に乗り上げ、百数十人の邦人婦女子と共に再び陸路マニラにとって返さなければならなかった。しかもマニラにとどまること数日にして、再び着の身着のままマニラ脱出の婦女子満載列車に乗り込まねばならなかったのである。

彼女がマニラで勤めていた会社は、軍用宿舎にあてられ、殊に通経部隊の将校たちで占められていた。したがって、戦線へきても思いがけない所で、思いがけない知人に巡り合うことも珍しくない。慌ただしい身には必要以外の品がひどく邪魔になったりするので、こうした知人に巡り会えば、必ず若干の品が贈物として、次の駐屯地での不自由が分かかっていても残していく。少量の米と塩しか与えられない私たちにとって、こうした将校たちが残してくれる幾ばくかの軍用粉味噌、粉醤油などはこの上もない珍味である。時には本物の糯米でつくった餅に、白い砂糖を使った品が手に入ったたり、また、彼女の自慢のカモテンカホイの根で作った餅ができると、同居のだれ彼に配給した後で、そっと私に余計に渡してくれることも稀ではなかった。彼女たち乙女部隊は、何日目かに交替で近くの軍用農場に使役に出なければならぬ。これがまた彼女たちにとっても楽しみである。帰りにはほんのわずかではあるが、新鮮なペチャイが与えられ、三度、三度野草で過ごしている身には大した御馳走だった。また、

原住民からいくらかの品を入手し、私たちの貧しい食卓に添えてくれた。

一日一日が戦いである。敵機の下でする糶摺り、臼碾き、軍衣修理、耕作などなど、どの一つを取っても、乙女には耐え難い労働である。殊に機械と道具を持たない素手の戦いである。しかも、終日何回となく壕へ飛び込まねばならない。そして夜がくると皆救われたように、互いに生きていたことに対する、何者にもしれぬ感謝の気持ちが自然に人の心を和らげて、戦陣を目の前に控えたこの地にも、不思議な平和が訪れる。

そうしたとき、働く乙女たちのために幾度か心ばかりの夜宴が張られる。椰子の葉陰に月を眺めつつ芝生の上に円陣を作って、二世も一世もみつめ合いながら一杯の砂糖湯を楽しみながら歌を歌う。歌ほど人の気持ちを微妙に変えるものはない。戦陣の歌、故郷の歌、自分たちでつくった替歌など思い出しても吹き出すほどのものでも、何か真実だけがひそんでいて、心をとらえてしまう。月明かりの中でする遊戯も幼稚園の幼

子に戻って、腹を抱えながら笑いのとまらぬこともある。軍歌を歌いつつ団体行進も何か悲壮な気持ちが流れて、自ら励まし生き甲斐を感じずにはいられなかった。そして、ただひたすら祈ることは祖国の勝利、山の向こうで戦っている夫を父を兄弟を思っ

友軍機ついに来たらず玉砕地を求めて敗走

○〇隻の新鋭部隊が、アバリの秘密港へ無傷で上陸したニュースがとんだので、今のエンジンの音が違うが味方かと、飛び出したとたんに、バリバリと刺すような敵機の機銃掃射をあびる。

友軍機が紀元節（二月十一日）にはくる、三月十日の陸軍記念日にはくる、と一日千秋の思いで待ち焦がれたが、ついに来たらず。日ごとに砲撃の音が大きくなって戦線が近づいてくるのがだれの耳にもそれとわかった。

バンバンの要衝も、ラトリエの守りも影薄く、前線から転進してくる部隊の引き締まった表情が、友軍の不利を物語って輸送が次第に混乱の一途をたどるころ、婦女子移動の司令部命令が総領事を通して通達され、

いよいよ、軍・官・民もひと塊に玉砕の期が近づいたことが感知されるようになった。だれもこの大きな運命から逃れようとする者はない。ただ、立派に死のう、一緒に死のうと思うだけだった。早急に避難移動の計画が進められていった。

一台の車両も持たない村では、病弱な母親を持った子供たち、一人で何人もの幼児を抱えた母親たちから子供を引き離して、係累のない娘たちに何人か割り当てて、次の目的地まで送る計画に私たちは夜も昼もなかった。今までも移動は皇軍の勝利を信じていたので、苦しいながら一縷の望みがあったが、今度こそは皆、死出の旅に立つ思いで、ここまで運んできたボストンバッグやトランクは、中身ぐるみ世話になったイロカイたちに贈った。玉砕する時の晴着に、白い下着の一、二枚と持てるだけの食料をリュックサックに背負わせて、数十人ずつ梯団を組んで夜にまぎれて逐次送り出した。闇にまぎれて軍官民ひと塊になって山奥へ山奥へと。

夜ごと、日暮れを待っては一梯団数十人娘たちを中

心に各々割り当てられた数人の幼児を背負い、あるいは手を引いて、三カ月余り過ごした思い出深いボンファルを後に逃れた。

そうした移動が何日か続いた。ところが、歩行不能の患者、妊婦とその乳児数十人これらをいかにするか駆けずり回って交渉した結果、ツバサ部隊のトラック二両を借用することになったのは、最後の梯団が出発して一兩日後である。やがて午前一時、残る総領事以下数人に見送られ、ヘッドライトを消した車が北へ北へと走って行った。

闇夜の街道はすでに車両を失った友軍部隊が水牛を挽き、糧秣を背負って延々声もなく黙々と黒い影を落としながら落ちのびて行く。その中に、三三五五娘さんたちに手を引かれた幼子たちが、軍と運命を共にすべく、哀れ死の行進をしていた。敗戦の影が刻々と迫り、名状しがたい悲しみが、夜明け前の冷えた空気とともに身に染みてくる。今はただ、軍司令官山下大将与共に玉砕するだけがすべての希望であった。

その中に十四歳、九歳、八歳の三人の子を連れたチャ

子がいた。

この敗走の一路にも航空部隊掩護のもと、怒濤のように敵の戦車部隊が追ってきた。天運拙くランタツプにおいて、最初の尊い犠牲者を出さねばならなかった。ランタツプ鉄橋は敵機により壊滅し、速成の仮橋の上でトラックが故障し、数十台の車両が停滞して、歩行部隊を阻んだ。

折も折、二期で雨量を増した川は、大洪水となり、一挙に仮橋をのんで唯一無二の敗走路はここに絶たれた。敵戦車部隊は背後に迫り、機銃掃射は頭上に、進退極まった友軍婦女子は、濁流に飛び込んで自決するもの、泳いで流されるもの、流れの中で夜を明かすもの、一大混乱が惹起された。闇夜に炸裂する砲弾の雨の中で、撃ち倒された女子供が「兵隊さん助けて」と声を限りに泣き叫ぶ中を混乱した部隊が駆けて行く。

敵の集中射撃が続く。阿鼻叫喚!!

敗走につぐ敗走、移動につぐ移動、軍官民秩序と目標を失って、飢、病、蚊、雨、爆撃、砲弾、土匪と疲れに追われ追われて、母は子の、子は母の屍を、昨日

はあの川べりに、今日はこの岩陰に棄てつ棄てられつ、道なき山中を離れ離れにさまよったが、夢に描いた玉砕の場所と機会は恵まれなかった。

#### アシン河畔

ルソン島北部山岳地帯のランタツプ、ファウムスクールから三百十八キロの間道を抜けて友軍最後の拠点キヤンガンへ、更にバクダン、マゴック、ゴアンへの敗走の一路は惨憺たる地獄街道であった。そして行き着いた先はアシン河畔。二十世紀の今日まで文明人の足跡をのこしたことなきおそろしいイゴロテ族の蛮族地帯である。その蛮族さえ踏み得ぬ重畳たる山嶮を縦横に縫って、血と泥にまみれた数万の軍と婦女子の群れが、圧倒的な敵の立体砲火に追われながら將軍も、娘も、乳飲み子も、戦友や肉親の屍を越えて、人間とも思えぬ動物の本能のままに、敵が呼号するいかなる科学力、機械力にも耐え得るであろう天然の要害を求めて逃げ回った。それは全く正常なる人間の可能な範囲を逸脱した行為である。

人類が地上に棲息して以来、持ち得た最高度の科学

的兵器と、戦術を持って陸海空ひた押しに押し来て来た敵数は、更に地形を熟知した、原住民軍の協力のもと、破竹の勢いで皇軍を一挙に粉砕すべく数十万の将兵と数千の非戦闘婦女子を、こころソソ島北部人跡未踏の山岳地帯へ追い込んだ。敵の誇る科学的立体砲火の前に、極度の武器、兵糧の欠乏は、さすがに豪快山下奉文大將をしてもその挽回にいかんとも打つ手を失わしめ、わずかに斬り込み戦術という部分的戦闘によって敵の進撃を阻み、時を稼ぐ外、なす術もなかった。

砲弾に追われながら野草を求めて、動乱の戦陣を彷徨する邦人婦女子の群れ。砲撃と爆撃と土蚕の襲撃におびえつつ、行く先々で足手纏いと軍の厄介者扱いされ、飢えと、病と絶望に細りながら、山から山へ食を求め、塹を求めて移動する戦場のジブシーだった。

ここまでは逃げてきた。そしてこれから先は逃げられぬ。

そしてそこに正に二千年を遡った原始生活が繰り広げられた。ランタツプ以来惨憺たる犠牲を出した軍も邦人もあらゆる秩序と編成は人為を越えて天険に阻ま

れた。頼みとする軍からは明らかに足手纏いとうるさがられ、糧秣配給はもちろん停止され、雨露をしのぐ家屋（ゴロテ族が逃げ出した原始家屋）は軍に占領され、あまつさえ、わずかに道らしきものは、軍の専用道路と称して婦女子の通行は禁止され、峻険をよじ登って、敵に対する安全地帯に到着すれば、先回りした軍によって占領され、その都度ここは第一線だ、と怒鳴られる。果ては唯一の天然食料、山の斜面のいも畑は何々部隊専用と称して夜昼小銃を持った警備兵がいた。婦女子が立ち入れれば発砲された。

千数百人の婦女子が集団移動しては、到底草さえも得られず自滅である。そこで領事館の指令により半数の七百数十人は、西副領事を責任者として、アシン河畔を遡り、後の一隊は私が連れてホヨ方面に食を求めて、敵機の下、塹定めぬ放浪の生活が続けられた。敵機の爆撃の目標が近づくと、いやでも移動を続けなければならぬ。経験というものは恐ろしいもので、爆撃目標を毎日見ていると、明日はどこをやる、ということが確実に分かってくる。すると、一夜のうちに移

らねばならぬ。そして、明くる日は昨日の塙が焼き払われるのを見て暮らす。

爆撃は避けることもできる。問題は食物である。八月は雨期のため、夜ごとのスコールにも見舞われる。塩もなくなった。マッチもきれた。

夜が明けるとピストル一挺を唯一の武器として山を越え、次期移動地を物色しにいかねばならなかった。移動地偵察に出掛けたまま蛮族たちのボロ（山刀）に首をかかれて胴だけになった偵察員の死骸を見ることもあった。ここアシン河地帯のゴロテは最も精悍をもって知られている。どこの家にも人口の屋根下には骸骨が飾られてあり、数が多いほど勇猛の証であり名門ということになる。

こうした生活を続けながらも戦争に勝つことを信じ、戦勝のピラを撒いてくれる日を待ちながら、もう一度マニラに帰る日を、そして祖国の土を踏む時の大きな感激を夢に見て過ごした。

毎夜のように驟雨に見舞われ、朝になっても晴れることのない日が幾日も続いた。ジャングルが覆い被さっ

た谷底の岩陰に、粗朶そだをもたせて萱を葺いてはあるが、壊れて残った家というには名ばかりの、四方壁のない土蛮の廃家の床下に雑居して、わずかに雨露を凌いだ。一夜の毛布にくるまって土の上に転がって雨と夜霧にしっかりと肌まで濡れて夜を明かすと、もう観測機が飛んで朝のお客様がくる。山では敵機のことをお客様と呼んでいた。

夜は雨にうたれ、飢えと病に日ごと痩せ細って、目覚めると、親しい者の冷たくなった屍を見ねばならぬような日の連続だった。爆音に慌てて谷間の叢にくぐれば、そこにカッと目を見開いたままの死骸があり、末期の水を求めてここまで下りてきて、そのまま水際で力尽き逝ったものと思う。

そうしてここを最期の死に場所とアシン河湖畔にある名も知らぬこの土地に落ち着いて、もう幾週間たつたろうか。その夜も湿った毛布にくるまって皆黙ってはいるけれど、眠れぬ証拠に寝返りを打つ。一人が寝返ると次々に動いて体をくっつけ合っているの、脚一本思うままに伸ばせない。そしてみんな空腹を我慢

しているの、唾を飲み込む音まで体づたいに伝わってくる。

そんな時だった。谷を登りつめたジャングルの向こうで、かすかに人を呼ぶ若い女の声が白い夜霧を通して聞こえてきた。寝たままの一人が「区長さんセンセイって言ってますよ」と口を切った。「だれだ」隣の谷の斜面の中腹で霧に向かって聞き返した。二言三言やり取りが雨の中を走ったころには、私はもう暗闇に向かって駆け出していた。

私にはもうだれであるかはっきり分かっていた。「オーイそこで待っているんだぞー」霧の中に叫び叫び地形を知ったジャングルをかき分けて行った。

谷間に下りる三叉路の大樹の下に、濡れるに任せて悄然と立ちつくしていた二つの黒い影、「どうしたんだ今ごろ、どこをうろついていたんだ雨の中を、でもよく訪ねてきたな」それはボンファルで別れたチャ子であった。「三PHの近くで前に知っていた中尉さんが、二十キロも行けば先生の連れている邦人部落があると聞いて：」私はうれし泣きというものをほんとう

に見た。それから、私の知らぬ同行の友を引き合わせるのだった。だれかが松明たいまつに火をつけて、暗い床下に明かりがゆらいだ。最後の一枚というとおきの下着を出し合ったり、明日の用意に残しておいた雑草料理の飯盒を温めたり、私の知り合いが訪ねてきたというところが、とに角、皆を喜ばせてこの夜更けの客を迎えたのが嬉しかった。

その夜から狭い峠が一層狭くなって体をくっつけて再び横になった。人々の眠りを遠慮しながら、余りたくさんのお出来事を一時に言ってしまうのもどかさにつまりながら、娘の身に背負い切れない苦難の数々を、夜通し語るのだった。ボンファルを出るとき、私が託した三人の子供たちが死んでしまったことや、部隊に着いて今日まで私たちの邦人部落を探し歩いた数十日の苦しい出来事を：雨垂れがポタポタと毛布の上

に落ちた。  
次の日から新米のチャ子に芋の葉っぱや、小さな里芋の野生している山を教えたり、薪にする粗朶を集めに伴わねばならなかった。

そうした幾日かが続いているうちに、私は妙な空気に気がついた。山の中で乏しい中を、今日明日をもしれない生き方をしていると、皆の心が感じやすくなっている。初めは温かく迎えてくれたものの、狭い家の雑居に二人増えたことへの不満が、だれ彼の心にも窺えた。私は毎日村を回って死骸を埋め、身元調査をしてまとめる。川を渡って本部の指令を受け、軍と交渉する。事実、数百の女子供が私を頼りに生きている。折角、今日まであらゆる苦難を分かちあって生死を共にしてきた人たちを、新米のチャ子のために仲間割れしては申し訳ないと、今までの人と仲間割れせず、割り当てた方に移って欲しいとすすめてみた。死を賭して戦陣をくぐり雨に打たれてこの山の中に自分一人を頼ってきたものを、目にいっぱい涙を浮かべて不承不承うなずいた、チャ子の白いうなじがとても悲しげな目に浮かぶ。

## 終戦

私は、石川博士と二人でアシン河を渡っていた。川向こうの領事たちの隠れ家で、今日は最後の会議が開

かれる。前の会議があつて以来、この十日ほど私の心は重い鉛を飲んだように夜を迎え思案に余つて朝を迎えた。

情報によればマゴックの守りは破れ、近日中に敵戦闘部隊がこの土地に殺到する見込み、必要に応じて最善の方法手段を講ぜよ、と老総領事の命令だった。故国を発つたときに、既に覚悟はできていた。そしてマニラ脱出以来、事有るごとに、覚悟を新たにはしてきた。だが今度の場合、生き残った二百数十人の女子供を、いかにすればよいか。山の向こうの敵の砲兵陣地からは、夜となく昼となく撃ってくる。ダーン、ヒューン、ダダーン、全く生きた心地もしない。殊に夜の砲弾のうなる音は腸の縮む思いがする。いつ殺到するのかもしれない敵に対して、私は最後の腹をこう決めた。

まず急を知つたものは家屋に火をつけること。それを合図に全員谷底の窪みに集合すること。そして各自手持ちの拳銃を持って、次々に自決リレーを執行せよ。と婦女子に伝えてあつた。

やがて壊れかかった廃屋の床下に老総領事を囲んで

会議が始められた。館員四人、医官二人、学校関係者二人、日会一人。アシン地区の総陣容だ。座して死を待つか推して切り開くか、議論を戦わせた結果、「このまま数百の婦女子を飢え死にせしめるには忍びない。日ごと十数人の生命が飢えのため絶たれていく。全員自滅あるのみ、衰弱しきってからではおそい。今のうちに食料を求めて、敵陣を破って脱出しよう」

そして、この案を携えて司令部との交渉に発った西副領事から、交渉拒絶の報が述べられた。

軍としては、足手纏いの我々婦女子だが、一人といえども捕虜となることは軍の面目が許すまい。ともあれ我々の移動は許されぬ。敵襲を待って一挙に自決あるのみであった。

敵陣突破の希望空しく、その帰途敵機の撒くビラによって、私は初めて終戦を知った。まさに八月十六日午後三時、これまでビラは幾度となく撒き散らされた。しかし今日のビラは違っている。天皇陛下の命により講和条約成立す。またいつもの投降勧誘の手ではなからうか。今日に限って爆撃せずと帰ったことも変わっ

ている。私は迷った。戦争は終わったに違いない。私は道なき道を駆けて帰った。空腹も苦痛も忘れて人々の住居を訪ね、泣いて読んで聞かせた。読む者も聞く者も泣いた。不思議な涙、嬉しいとも悲しいともけじめがつかぬ涙、ある者は信じなかった。信じまいと心の中での戦いを如実に示した。そしてある者は、そのやせ細った手にビラを握って、震えながら最期の息を引き取った。すべては終わったのだ。

忘れ難きこの土地を後に、本土鹿児島に上陸したのは、昭和二十年十一月初めのことであった。

### 【執筆者の横顔】

昭和十八年四月十六日、日本全土より比島派遣教員団として選ばれ、教育実践隊として万歳の声に送られて船出し比島に渡る。日本人小学校訓導となり、交転極まりない三年間を送る。

敗戦色濃くなったマニラを十九年十二月十五日脱出、八カ月余りの悲惨な毎日をごす。比島の悲劇は邦人婦女子が軍の命令で山中に逃げ、あまりの苦しさに脱

落したくても、一人たりとも捕虜になることは軍の面目が許さぬと、あくまでかりたてて奥へ奥へと移動させ、その挙げ句、足手纏いになるとして、終戦になっても山を下りることを許さなかった。軍の命令に背き勝手なまねをすると、内地には返さないとおどされていた。祖国の土を踏むことだけを夢見た人たちには、それは最も恐ろしいことであった。

比島は一月が乾季、四月、五月が一番暑く学校は夏休みとなる。八月は雨季、文中アシン河に水量が増したり雨ばかり降っているというのは、雨季となっているからである。

御子息宣昭氏は「父は厳格で曲がったことのできない潔癖な人である反面、人には深い優しさを持っています」と語る。また御息女侑子様は「父は外見的には相当ワンマンであるが、何でも父が言い張ってことを決めているように見えるが、結局決まったことは母の言う通りになっていました。父と母は表現の仕方に違いはあっても、心は一つのように見えました。両親は二人の間ではなく二人で一つのものという本当の夫

婦愛を見せてくれました」と語る。

(東京都引揚者団体連合会)

常務理事 大平 禮子)

## 台湾からの引揚者の労苦

東京都 織田 憲 吾

私は昭和三年山口高等商業学校(現山口大学)を卒業し台湾総督府交通局に就職いたしました。当時の日本は大不況の真っ只中でした。前年、浜口首相が東京駅で暴漢に銃殺されるという事件のあったころでした。当然、就職難の時代で、今では考えられないほど仕事もなく、困難な時代でした。私は職を外地に求めることにし、台湾総督府の財務局と交通局を受験しました。両方共採用通知を受けましたが、交通局の方が一日早く通知をくれましたので、交通局鉄道部に就職いたしました。

故郷佐賀県出身の先輩が三井物産台北支店に勤務中